

2021 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	大学生の自尊感情と就業用文章の産出困難感との関連 —書く力と自尊感情を高める教育プログラムの開発—
キーワード	①自尊感情、②文章産出困難感、③自己PR文

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	ヤマダ タカコ 山田 貴子
配付時の所属先・職位等 (令和3年4月1日現在)	安田女子大学 公共経営学科 講師
現在の所属先・職位等 (令和4年7月1日現在)	安田女子大学 公共経営学科 講師
プロフィール	公立中学校の国語科教員として10年間、特に Active Listening (積極的傾聴) と作文指導に重点をおいた授業を展開してきました。校務で生徒指導・教育相談、進路指導を担当する中で、文章産出の力は作文技術面だけでなく、自尊感情(あるいは自己肯定感や自己効力感)に大きく影響されるのではないかという問題意識が芽生え、それが現在の研究テーマに至りました。大学に籍を移して9年になりますが、「書くこと」を通して多面的・多角的に自己理解を深め、自己実現に向けて将来に希望をもちながら職業選択できる学生の育成に努めています。

1. 研究の概要

本研究では、大学生の自尊感情と「自己PR」や「学生時代に力を入れて取り組んだこと」など自身の強みや自己有能感を得たことについて書く就業用文章(エントリーシート;以下、「ES」)の産出場面における困難感との関連を検討した。就職活動を控えた大学3年生を対象に、自己好意尺度/自己有能感尺度(Tafarodi & Swann, 1995; 藤島・沼崎・工藤, 2003)、文章産出困難感意識化尺度/文章産出困難感文章化尺度(岸・梶井・飯島, 2012)、ピア指向性尺度(富永, 2012)からなる全5種類の質問紙調査を実施した。1回目の調査の後、キャリア形成科目の授業において自尊感情を高める自己分析アプローチ全7種類を実施した。その後、同じ質問紙を用いて2回目の調査を実施した。分析対象は266名(pre:129名、post:137名)であった。

(1) 自己分析アプローチを体験する前後の得点の変化を t 検定で比較した結果、文章産出困難感意識化/文章産出困難感文章化、ピア指向性に有意な差が確認された。しかし、自己好意と自己有能感に有意差は見られなかった。(2) そこで、自己好意および自己有能感得点を低中高3群に分け、文章産出困難感との分散分析を行なった。その後の多重比較の結果、自己好意高群および自己有能感高群は、文章産出困難感文章化得点と下位尺度「アイディア」の2項目で有意に高かった。文章産出過程は【プランニング】と【文章化】の2つに大別されるが、このことから、自尊感情の高い群ほど【プランニング】段階に困難感を感じていないことが予想された。(3) そこで、文章産出困難感に与える影響を検討するため、重回帰分析(ステップワイズ法)を行なった。その結果、自己好意、自己有能感の2つの変数は除外され、ピア指向性のみ文章産出困難感に正の有意な影響を及ぼすことが確認された。このことから、文章産出困難感は、ピア・ラーニングの力で軽減できる可能性があることが示唆された。

■付記(2021年4月22日 学内倫理審査委員会にて質問紙調査の実施を承認)

2. 研究の動機、目的

大学生が就職活動の入口で直面するものにESの提出がある。本学でも5年前から「自立した書き手の育成」という目標を掲げ、就業用文章の産出を支援しているが、文章産出過程のうち【プランニング】段階で躓きを感じている学生が36.8%と増加傾向にある(山田, 2019)。また、ペアワークに心理的抵抗を感じ、2回目以降欠席する学生もいる。こうした背景には「(周囲と比較して)自慢できるようなものが何もない」、「力を入れて取り組んだと言えるような経験が何もない」といった自尊感情の低さが要因のひとつとして挙げられる。

多くの大学が職業観形成を目的としたキャリア教育や就職セミナー等の支援を通じて、ESの書き方を実施しているが、その指導の多くは作文技術指導が中心である。また、大学における日本語文章指導は、意見文や報告文など論理的・学術的文章が主流であり、ESのような自己呈示型の文章はあまり扱われてこなかったという現状がある。しかし、自尊感情の低下や過小評価は、進路選択時における自己効力感をさらに低下させ、モラトリアム傾向や職業不決断へと繋がる可能性が高く、キャリアデザインの形成に多大な影響を及ぼすと考えられる。

そこで本研究では、Kellogg (1994) の文章産出モデルである「知識の収集」「プランニング」「文章化」「推敲」の4つのプロセスのうち、【プランニング】に焦点をあて、「自己認識 (Self-awareness)」および「自己開示 (Self-disclosure)」の向上を目的とした自己分析アプローチを実践する。そして、自己分析アプローチの体験前 (pre) と体験後 (post) の自己好意/自己有能感、文章産出困難感意識化/文章産出困難感文章化、ピア指向性を比較することで「大学生の自尊感情と就業用文章の産出困難感との関連」を検討することを目的とする。

3. 研究の結果

(1) 5つの尺度得点における pre/post の平均比較

就職活動を控えた大学3年生を対象に、質問紙の構成で示した自己好意/自己有能感、文章産出困難感意識化/文章産出困難感文章化、ピア指向性の5つの質問紙調査を2回実施した。キャリア形成科目において実施した7種類の自己分析アプローチを学習する前後 (pre/post) で各尺度の平均点の差が統計的に有意かを確かめるため、それぞれ平均値を比較した(図1)。いずれの尺度も post 時は平均点が高くなり、文章産出困難感意識化の平均は、pre 時は93.03 ($SD=19.47$) であったが、post 時は97.89 ($SD=16.57$) に上がった。同様に、文章産出困難感文章化の平均は、45.08 ($SD=13.97$) から48.33 ($SD=12.57$) に上がった。また、ピア指向性得点の平均も、61.42 ($SD=8.99$) から66.04 ($SD=9.39$) に上がった。なお、それぞれの効果量は、自己好意 ($\Delta=.15$)、自己有能感 ($\Delta=.22$)、文章産出困難感意識化 ($\Delta=.25$)、文章産出困難感文章化 ($\Delta=.23$) となり、効果量はいずれも小程度だったが、ピア指向性 ($\Delta=.51$) のみ、中程度を示した。

また、対応のない t 検定を行なった結果、自己好意 ($t(264)=1.33, ns$)、自己有能感 ($t(264)=1.88, ns$) は有意ではなかったが、文章産出困難感意識化 ($t(264)=2.20, p<.05$)、文章産出困難感文章化 ($t(264)=2.00, p<.05$) は5%水準で有意であり、ピア指向性 ($t(264)=4.10, p<.001$) は0.1%水準で有意であった(表1)。

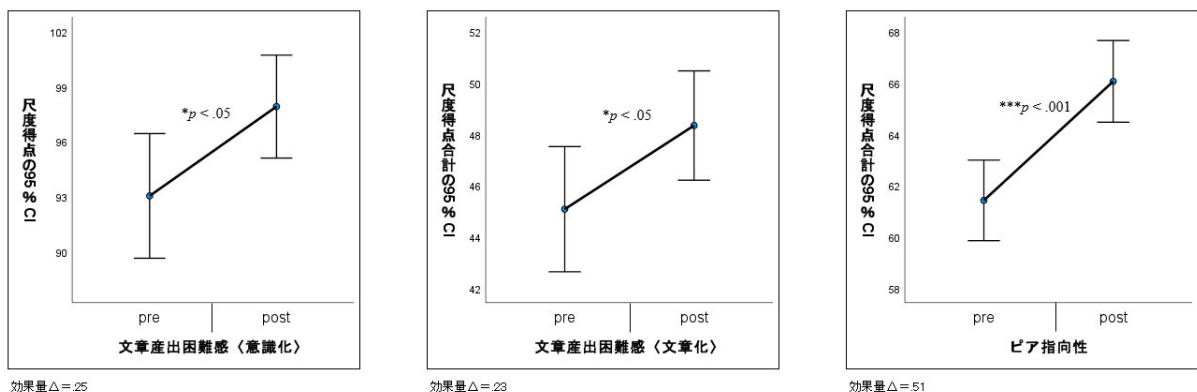


図1 文章産出困難感・ピア指向性の pre/post の平均比較

表 1 各尺度得点における pre/post の平均値・SD・t 値・有意確率

		度数	平均値	SD	t 値	有意確率
自己好意	pre	129	23.91	5.82	-1.33	.186
	post	137	24.77	4.65		
自己有能感	pre	129	22.29	4.71	-1.88	.062
	post	137	23.32	4.21		
文章産出困難感意識化	pre	129	93.03	19.47	-2.20	.029*
	post	137	97.89	16.57		
文章産出困難感文章化	pre	129	45.08	13.97	-2.00	.047*
	post	137	48.33	12.57		
ピア指向性	pre	129	61.42	8.99	-4.10	.000***
	post	137	66.04	9.39		

*** $p < .001$ * $p < .05$

(2) 自己好意・自己有能感の低中高 3 群比較

post 時の自己好意得点および自己有能感得点の平均値と標準偏差 (SD) を求め、平均値 (\bar{x}) $\pm 0.5SD$ の式を用いて、それぞれ低中高の 3 群に分けた。文章産出困難感との一元配置分散分析とその後の多重比較を行なった結果、文章産出困難感文章化の合計得点と下位尺度「アイディア」の 2 項目において、自己好意低群と自己好意高群は 5%水準で有意であり (表 2)、自己有能感低群と自己有能感高群は 0.1%水準で有意であった (表 3)。

表 2 post 時における自己好意の低中高群の分散分析とその後の多重比較

	自己好意低群 ($n=46$)	自己好意中群 ($n=58$)	自己好意高群 ($n=33$)	F 値	多重比較
文章産出困難感意識化合計	96.07 (12.22)	97.66 (17.87)	100.85 (19.36)	0.81	
全体構成	25.61 (4.05)	25.48 (5.48)	26.61 (6.13)	0.53	
表現選択	41.17 (6.08)	41.24 (8.19)	42.94 (8.25)	0.66	
読み手意識	29.28 (4.43)	30.93 (5.78)	31.3 (6.02)	1.70	
文章産出困難感文章化合計	45.26 (12.53)	48.64 (11.15)	52.06 (14.20)	2.92 *	低 < 高
アイディア	21.85 (7.51)	22.59 (6.52)	26.03 (7.59)	3.64 *	低 < 高
推敲	23.41 (6.59)	26.05 (6.15)	26.03 (7.87)	2.33	

※()内の数値は標準偏差

* $p < .05$

表 3 post 時における自己有能感の低中高群の分散分析とその後の多重比較

	自己有能感低群 ($n=47$)	自己有能感中群 ($n=52$)	自己有能感高群 ($n=38$)	F 値	多重比較
文章産出困難感意識化合計	96.15 (15.53)	98.17 (15.79)	99.66 (18.95)	0.48	
全体構成	25.38 (4.88)	25.77 (5.27)	26.34 (5.57)	0.36	
表現選択	41.04 (7.07)	41.58 (7.21)	42.42 (8.63)	0.35	
読み手意識	29.72 (5.25)	30.83 (5.24)	30.89 (6.02)	0.66	
文章産出困難感文章化合計	45.00 (12.65)	47.77 (10.72)	53.21 (13.60)	4.82 **	低 < 高
アイディア	21.17 (7.64)	22.85 (6.35)	26.08 (7.21)	5.18 **	低 < 高
推敲	23.83 (6.66)	24.92 (6.02)	27.13 (7.68)	2.58	

※()内の数値は標準偏差

** $p < .01$

(3) 文章産出困難感に与える影響を検討する重回帰分析

文章産出困難感に与える影響を検討するために、post 時における文章産出困難感意識化および文章産出困難感文章化を従属変数、自己好意 (X_1)、自己有能感 (X_2)、ピア指向性 (X_3) を独立変数として、それぞれ重回帰分析 (ステップワイズ法) を行なった。その結果、自己好意と自己有能感の 2 つの変数は重回帰式としての適合度が低く除去され、ピア指向性のみ 0.1%水準で有意となり、決定係数は文章産出困難感意識化 ($R^2 = .082$)、文章産出困難感文章化 ($R^2 = .098$) となった。寄与率は低く結果的に単回帰分析となったが、意味を成すことが判明した (表 4)。

表4 文章産出困難感意識化および文章産出困難感文章化の重回帰分析結果

	文章産出困難感意識化			文章産出困難感文章化		
	B	SE B	β	B	SE B	β
(定数)	64.43	9.70		20.69	7.30	
ピア指向性	0.51	0.15	0.29 ***	0.42	0.11	0.31 ***
R ²	.082			.098		

*** $p < .001$

(4) 自尊感情を高める自己分析アプローチに関する学生の反応

Aクラス(211名)・Bクラス(192名)の授業で全7種類の自己分析アプローチを実践し、授業直後に「取り組んでみたいもの」(Aクラス:回答率94.8%)と、1週間後に「実際に取り組んでみたもの」(Aクラス:回答率94.3%)を調査した(図2・3)。その結果、どちらも①リフレーミング、③スリー・グッド・シングス、②ネガティブ・リリースが上位を占めた。学生の自由記述からは「①自分の長所に目を向けられるようになった」、「③些細な幸せを実感することでくよくよ考える時間が減った」などポジティブな単語が多く散見された。なお、Bクラスも同様の結果となった。

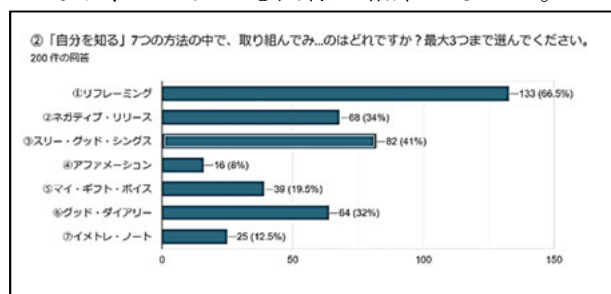


図2 授業直後の学生の反応

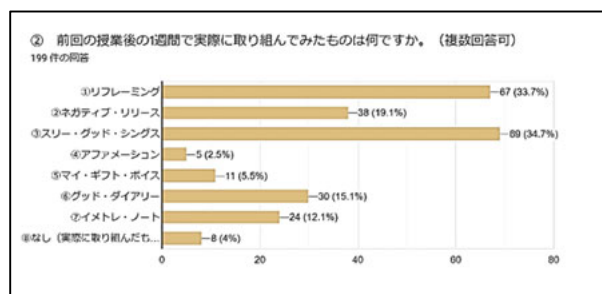


図3 1週間後の学生の反応

研究結果(1)から、数回の自己分析アプローチでは、自己好意/自己有能感といった自尊感情に顕著な効果は見られないが、自己の内面を開示し、語り合う体験によってピア指向性が高まり、文章産出困難感が軽減されることが示された。(2)から、当初の仮説通り、自己好意および自己有能感が低い群ほど「文章化」と「アイディア」の2項目で困難感を感じることが示された。(3)の分析でピア指向性だけが変数として残ったことから、文章産出過程において、対等で互恵的な関係をもつ〈仲間〉と学び合うピア・ラーニングを取り入れることで文章産出困難感を軽減できる可能性があることが示唆された。

4. 研究者としてのこれからの展望

これまでの先行研究(1980年代から2017年までの調査)から、日本の中高校生、大学生、成人いずれにおいても、自尊感情の平均値が低下していることがわかっている(小塩他, 2018)。自尊感情は、非常に複雑で難しい概念であり、環境や出来事、人間関係などに影響を受け、変動する。本研究では「自己分析アプローチを実践することで自尊感情が高まり、文章産出困難感を低減できる」という仮説を立証できなかったが、ピア指向性という〈仲間の存在〉の有意性は示された。今後は、複雑な自尊感情をより多面的に測定し、女子学生がもつ心理的特徴を分析するとともに、ピア・ラーニングを用いた有効な支援方法を探っていきたい。

5. 支援者(寄付企業等や社会一般)等へのメッセージ

本研究にご支援をいただき誠にありがとうございました。コロナ禍ではありましたが、奨励金のお陰で研究環境を無事に整え、目的を遂行することができました。改めて御礼申し上げます。本研究では、文章産出困難感を低減できるものとして〈ピア指向性〉の重要性が確認できました。この知見をもとに、安心して自己開示ができる学習環境を整え、大学生だけでなく、初等中等教育にも応用できる汎用性の高い自己分析アプローチの実践プログラムを開発していくことで、日本の若者の自尊感情と「書く力」の向上に寄与していきたいと考えています。